

結核診断に必要な喀痰塗抹検査回数

小林賀奈子 矢野 修一 西川恵美子 岩本 信一
多田 光宏 門脇 徹 木村 雅広 池田 敏和

要旨：〔目的〕結核の診断に集菌塗抹の蛍光染色による3連続喀痰検査が必要か検討した。〔対象〕2005年4月1日から2012年12月31日の間に肺結核にて入院し、抗結核薬治療を受けた394人のうち、喀痰培養検査が陽性であり検体の選択基準を満たした379人を対象とした。〔方法〕3連続喀痰検査における1回目喀痰塗抹陽性率と、2回目・3回目の累積喀痰塗抹陽性率を後ろ向きに調査した。検体の性状をMiller and Jones分類を用いて評価し、1回目の喀痰を粘性痰と膿性痰に分けて検討した。また喀痰採取方法や空洞病変の有無で塗抹陽性率の差を検討した。〔結果〕対象の379人中、300人が1回目の喀痰塗抹検査で陽性であった（陽性率79.2%）。粘性痰と膿性痰において1回目の塗抹陽性率に差があった（72.3%対91.2%）。一方、喀痰採取法や空洞病変の有無は1回目の塗抹陽性率に影響しなかった。〔考察〕粘性痰では2回目は有意に塗抹陽性率が上がったが3回目は有意ではなく、膿性痰では1回目で高い塗抹陽性率が得られ、膿性痰を採取することが重要であると考えた。

キーワード：3連続喀痰検査，集菌塗抹，塗抹陽性率